

教育委員会会議の議事録（平成30年6月定例会）

◆ 日 時 平成30年6月29日（金）午後2時から午後4時45分

◆ 場 所 上杉分庁舎 教育局第1会議室

◆ 出席委員

教育長	佐々木洋
委員・教育長職務代理者	吉田利弘
委員	齋藤道子
委員	花輪公雄
委員	中村尚子
委員	里村正治

◆ 会議の概要

- 1 開 会 午後2時
- 2 議事録承認 5月定例会
- 3 議事録署名委員の指名 中村委員
- 4 報告事項

（1）平成30年度仙台市標準学力検査及び仙台市生活・学習状況調査結果の概要について

（学びの連携推進室長 説明）

資料にもとづき報告

齋藤委員 標準学力検査の結果で小学校、中学校と継続して理科、社会の基礎的知識が低くなっているが、全体的な結果を見ると、応用力は以前よりも高い水準になっている。応用がきく、非常に力のある子供たちだと信じているので、ぜひとも理科、社会については、今後、総合的な学習等をさらに重視することで、基礎的知識は伸びると思う。

生活・学習状況調査については2点ある。まず1点、「学校生活」の2番「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」について、（C）「どちらかといえは、そう思わない」「そう思わない」という回答割合を示していただいたことは非常にありがたく思う。もっと欲を言うと、この答えをした子供たちがどのような理由でそう思ったのかを聞いてみたいので、可能であれば記述で回答できる部分があるとよ

い気がする。

それともう1点。27ページの「道徳心・挑戦・夢」の64番と67番。67番の「自分には良いところだけでなく、悪いところもあると思う」ということに対して、多くの子供たちが自分に悪いところがあることを認めている。自分を素直に見つめることができる力を持っているのだと感じた。だからこそ、64番の「自分には、良いところがあると思う」ということをもっともっと子供たちには見つけ出してもらいたい。謙虚だけではなく、自分をぜひとも肯定して貰いたい。特に小学生や中学生には、もっと夢を持っていただきたいと願う。

学びの連携推進室長 基礎的知識と応用力を比べると、応用力は非常に結果がよかった。これから詳しく分析していくが、事務局の見解としては応用力に関する基礎的知識がある程度の定着があったということで、良い結果だったと思っている。ただ、基礎的知識がこういった成績なので、こちらも丁寧に分析する必要がある。基礎的知識がしっかり身につけてくれば、それに関連した応用力も今回のように上がってくると考えている。

いじめに関する質問のデータについては、学びの連携推進室だけではなく教育相談課とも連携し、学校ごとに細かく見ていきながら、ぜひこのデータを有効活用することを考えていきたい。

27ページの64番と67番の話があった。67番は自己肯定感を高めるためには、こういった面からの調査も必要であるということで28年度から追加した。いろいろな側面から自己肯定感を高める取り組みについてさらに検討を進めていきたいと考えている。

花輪委員 標準学力検査については、理科、算数がよくない気がする。去年も理科と算数が悪かったと記憶している。そうすると、非常に系統的というか、少し何らかのシステムティックなことがあるのではないかという印象を受ける。例えば、同一集団を見たグラフということで、中学3年の場合というのが理科と数学が右肩下がりだったと思う。例えば12ページの紫色が理科、黄緑色が数学だが、少しシステムティックにそれが見えるので、もう少し深い分析をして対応していただきたい。理科離れとよく言われるが、実験は子供たちが非常に興味を持つと思うのだが、先生方も多忙で実験準備が大変なので、実験なしで済まそうとか、そういうことになっていないのかどうかも含めて分析をお願いしたい。ただ、幸い国語がすごくいい。国語がいいということは読解力があるということで、実は、算数、数学、理科なども読解力がないと理解できないので、ベースは非常に高い。何らかの対応でよくなっていくのではないかと思った。

2つ目が生活・学習状況調査については、いずれもいい方向には行っていると思うのだが、少し気になることがある。例えば16ページの13番と15番、24ページの50番、51番などで、中学2年生、3年生が一挙に落ちている。さらに28ページの71番「将来の夢や目標を、持っている」、72番「自分の将来を考えると、楽しい気持ちになる」というのも中学2年生、3年生で下がる。これを考えてみると、自分がどこの高校に行くとか、自分を見詰めだす時期なのだと思う。高校受験が決定的に自分の人生をすべて決めるかのごとく思ってしまうようなことになっていないか。先ほど自己肯定感の話があったが、中学2年、3年ぐらいのときに、それを持てずに少し投げやりな態度になるのかなど。だとすれば、必ずしも学力として捉えられるものだけで人生は決まらないし、多面的な能力がある。ここでは5教科で学力を判断するが、そうではない様々な面で自分が世の中の役に立っていけるという自己肯定感を持たせ

るような教育も必要だと思う。もし私の分析が正しいのであれば、中学2年生、3年生に対して何らかの対応が必要だと思う。

学びの連携推進室長 指摘のあった理科、算数の学力について、事務局としては単年度で見るのではなく、経年変化で見ているが、他の教科以上に、算数、数学、そして理科については課題があると捉えている。より丁寧に見ていくと、算数については、小学校4年、5年生で落ちるというところが見えてきたので、3月に策定した確かな学力育成プランでも重点事項として、今年度幾つかの施策に取り組んでいる。もう一つ、理科については小学校高学年の理科の観察・技能が落ちており、例えば植物の成長の観察がなかなか改善されないという課題があったので、これも確かな学力育成プランで今年度から新しい施策に取り組むこととした。

生活・学習状況調査では中学校2年生、3年生の課題について指摘があった。発達段階と言えればそれまでではあるが、やはり中学2年生、3年生が他の学年に比べて右下がりにどんどん落ちてきていることは、事務局でも危惧している。その中でも、中学2年生が項目によっては前年度より上がってきた項目もある。

広い意味で学力と考えた場合には、自分づくり教育などで子供たちの自己肯定感や挑戦心、そういった部分も育成することが大切だと考えており、いわゆる非認知的な能力の部分も大事にしながら、今後もそういった資質、能力を高めるように努めたい。

中 村 委 員 1つお聞きしたいのだが、基礎的知識と応用力の割合を8割から7割、2割から3割に変えたのは、こういったところを見込んでいるのか。

学びの連携推進室長 確かな学力育成プランを策定するときに、今後子供たちに求められる学力とはどういったものかということのを改めて事務局で議論した。今までは基礎的知識を身につけてから応用力という、いわゆる段階的な力という捉え方をしていたが、よくよく子供の様子を見たり、実際に生きて働く力を考えたときに、これまで学んだ基礎的知識の中で、必要なものを改めて認識したり、学んだ知識と知識を結びつけて新たな知識にしたり、そういった応用的な部分に触れることによって、知識を豊かで確かなものにするという流れがあるのではないかということで、応用力を3割に増やした。

中 村 委 員 それでは、来年もこの形でやるのか。

学びの連携推進室長 今年度の学習状況を丁寧に分析しつつ、国では全国学力調査の問題の形式を変えるという動きも出ているので、その動向も踏まえながら、今後の仙台市に必要な学力検査等のあり方も含めて検討していく。

中 村 委 員 よくわかった。

そのほかのところだが、上がった部分については、先生方のご努力、そして児童生徒の自身の努力というところで評価したい。ただ、4ページの小学校の応用力のところ国語も社会も算数も表現の部分が軒並み目標を下回っている。表現というものは人とのコミュニケーションなどにもすごく大切な部分だと思うので、ぜひともここを上げていただきたいと思う。

生活・学習状況調査について、私も14ページの「いじめは、どんな理由があっても、いけないことだと思う」、「どちらかといえば、そう思わない」というところはぜひ有効活用していただいて、今後の施策に盛り込んでいただきたいと思う。

16ページのところ、先ほど花輪委員からもあったが、やはり中学1年になると上がる。中学1年生になって志したことを持ったまま、中学2年、3年と上がれるようなやり方が何かないのかと、親としても家庭としても、考えていかなければいけない部

分だと思ふ。

良かった点は、「先生はあなたの良いところを認めてくれていると思う」、「家の人はあなたの良いところを認めてくれていると思う」という部分が、上がっている。特に中学3年生が高い比率で上がっている。中学3年生なので思春期を迎えていると思うが、それでもこうやって親や先生はちゃんと認めてくれていると感じることができているのは、先生方の努力、そして、家庭の力も大きいのではないかと読み取った。ぜひともこれは続けていってほしいと思う。

自由時間のところのスマホの使い方について、「家の人と話し合っている」という部分も全学年増加している。持っている年齢が低年齢化して、ほとんどの子が持っている状況になっているが、家庭としても十分に子供たちに目を向けて、使い方を一緒に考えていただけている部分だと感じたので、こういった投げかけを継続して欲しい。

学びの連携推進室長 表現に関しては、仙台市の子供たちの学力における継続した課題であり、何とか向上させたいと考えて、昨年度の提案授業でも、表現に焦点を当てたものを提供してきた。この表現という力は簡単につくものではなく、繰り返しその必要性を教師はもちろん、子供たち自身もその必要性を感じながらやっていくということ、それから教科の枠に捉われず、日常の中でも活用する場面をつくっていくことが非常に大事なポイントになる。今年度の提案授業において、国語の先生方に指導、改善の方策について、ぜひ考えてほしいということをお話している。

いじめに関しては、肯定的に捉えている子供が90%以上だからそれでよいではなく、否定的に捉えている子供たちを何とかしたいという指摘が昨年教育委員の皆様からあり、このグラフもそういった声をいただいてやったところである。

「良いところを見てくれる」というところが中学生で上がってきたという指摘で、これについては東北大学と共同で作成したリーフレットを各学校に毎年配布し、家庭の方々にも呼びかけてくださいという話をしてきたところである。平成27年度のリーフレットでは、自己肯定感を高めるためには、学校だけではなく家庭においても子供の取組みの良さを認めてほしいということをお話しており、仙台市PTA協議会の協力もあり、有効に活用された結果だと思っている。

スマホの使い方については、学校だけでなく保護者との連携が非常に重要なポイントだと思うので、地域の方も含めた保護者、家庭との連携を今後さらに詰めていきたい。

吉田委員 表現という話があったので、その話を受けて私の意見を申し上げる。まさに表現の力というのは一朝一夕では身につかないものであって、日々の授業の中で話す、書くという細かな蓄積でもって次第に力をつけていくものであるから、ぜひ継続して力を入れていただきたい。それに関して、学習状況調査の中で、普段の授業では学級の友達の間で話し合う活動をよく行っていると思うという回答が増えている。これはずっと高い水準で保っており、大変いいことだと思う。これは表現力だけではなく、話し合いをすることによって人との違いを知る。人との違いを知って、自分とは違う考えを持っている人間であり、そういう中で集団をどう築けばいいのかということをお話しながらわかっていく。そういうことがいじめの防止に結びつけることができると思っているため、今後も継続していただきたい。

5ページの中学1年生、数学の表現の目標値47.5のところは69.0と高い。この子

供たちは私の持っている過去のデータでは、4年生時から5ポイント、時には7ポイントほど目標値とのマイナス差があった。それが、この中学1年生になって、このように逆転した。前の教育委員会のとき、この子供たちについて、小中連携の一環としてぜひ中学校に引継いでくださいとお願いしたのが、このような結果になり、大変うれしく思っている。

その一方、先ほどからも出ているが、2ページの中学1年生の社会科の傾向というのは、集団的な傾向ではなく、単独学年での学習状況に問題がある。この結果は小学校6年生時の学習の様子が強く反映しており、こういう結果が3年ほど続けて起きているので、ぜひ、小学校6年生の社会科の授業のあり方も見直していただきたいと思う。

学びの連携推進室長 表現に関しては、グループ活動などで自分の思いを書くだけではなく話すなど、さまざまな形で表現の活動ができると思うので、今後も気をつけながら進めていきたいと思う。指摘のとおり、継続してやっていくということが、表現力を高めるためには重要なポイントだと思うので、子供たちの表現力が高まるようなさまざまな手だてを探っていく。

経年的変化というところで、昨年も吉田委員より小学校4年生の段階から数学の表現に課題があり、経年的な見方をしなければだめではないかという指摘があった。特に小学校6年生の全国学力テストでも算数の部分が落ちていたところがあったので、学校に呼びかけをしながら重点事項ということで話をした結果が、今回の標準学力検査に現れた。つまり意識して子供たちに指導をしていけば、このような形で伸びも出てくるということがわかった。

社会科であるが、標準学力テストは領域がかなり偏りなく、例えば戦後のことや日本の政治、日本国憲法あるいは世界の中の日本など、全部網羅的に出てくるもので、やはり担任の先生がそれに留意しながら継続して教えていかないと結果にうまく反映されていかない。昨年は提案授業の中で、日本の政治というところについて取組んでいただき、社会科は単なる歴史だけではなく、政治的な面もあるというところで提案授業を行った。今後も結果を受けとめ、提案授業の中でこういった形で改善方策が示されるか、確かな学力研修委員会で丁寧に検討していきたい。

里 村 委 員 15ページの7番が気になったのだが、「国語・社会・算数(数学)・理科・英語の中に、好きな授業がある」という問いに対し全体では80%超と高いが、小学校2年生から中学校3年生にかけて、徐々に好きな科目がなくなっている。これ以外の体育でも音楽でもいいのだが、自分の得意な科目、好きな科目にもっと自信を持てるような教育を果たして今やっているか。

経営の面から言うと、社員の欠点を指摘する経営が一般的であるが、社員の得意なところによく目を当てて伸ばしたほうがグループの成果が上がるということがある。言葉では「美点凝視」というものだが、その「美点凝視」をやれば、厳しい競争にも勝てるチャンスが出てくる。教育についても子供たちに、子供の美点をもっと凝視して教育したらどうか。例えばA、Bという科目で、ある子供は60点と40点だった。別の子供は90点と10点だった。今の教育では、90点と10点をとった子供に「だめじゃないか」と言うのではないか。そこで、2乗してみろという。例えば90点と10点の子供は、2乗すると、90の2乗で8100と10の2乗で100の合計8200点になる。60点と40点の子供は、60の2乗で3600と40の2乗で1600の合計5200点になる。

つまり、2乗すると90点と10点をとった子供の方が高得点になる。この90点をとった科目を子供の自信として伸ばしてあげる。

やはり小学校から中学校に向けて、自分の得意な科目を持たせるように、そしてその能力を伸ばす教育をもう少し強化する必要があるのではないか。これについて皆さんのご意見を伺いたい。

学びの連携推進室長 どうしても、どの子にもひとしく同じような力をつけるという教育になってしまうところもある。しかし、その一方で指摘があったように、その子の特徴というものを見つけて、それを伸ばしてやるという視点も同時に必要だと思っている。

今回の学習指導要領の改訂に当たり、学びに向かう力の育成というところも大きくクローズアップされており、全国学力・学習状況調査の中でも「国語と算数が好きですか」という項目があり、これが小学校では全国平均よりも上がっていかないという課題がある。子供たちが生き生きと前向きに物事に対して挑戦していく姿を育むためには、そういった子供の長所にも目を向けていく教育が必要だと思うので、どちらも大事にしながらやっていきたい。

里村委員 もう少し言うと、国語、算数、理科、社会、英語を、音楽、体育、図画よりウエートを置いていないか。教育行政上、科目をつくらざるを得ないとは思いますが、どんなことでもいいから子供の得意なところをもっともっと伸ばしてあげる。それによって、自信を持たせ、社会人として育っていく力を与える教育にもう少し力点を置いてやる方法はないのだろうか。そのような教育を行い、成果については学習状況調査でわかるようになるとうありがたい。

吉田委員 私も年齢とともにそのような考えになってきた。やはり人には、できること、できないことが必ずある。ところが、若いころ教員をやっていて、その境地まで達することがなかなかできなかった。今できなくても違う刺激を与えたら、この子はできるようになるのではないかという思いも強くあったが、子供たちの課題のところを何とかしてあげようという気持ちが強くなってしまったことも事実である。だから、先ほど室長が言ったように、両方見て伸ばしてやるのが本当のプロとしての教員なのだと思改めて思っている。

齋藤委員 私もできることであれば、子供たちの特色をもっと伸ばしてあげたいと思うが、それは年齢が大きくなるにつれて、その特色を伸ばせる高校や大学や社会でも可能なことで、せめて小学校、中学校のときには子供たちにどの教科についても最低限の知識を付けてもらいたいと、親としても社会人としても思う。

例えば算数はちょっと苦手だけど、体育が得意な子には、おそらく通知表で、あなたはとってもよく走れるし立派だと評価してくれていると思う。そして通知表を見た子供が、体育以外も頑張って勉強してみようという気持ちになれる導きを教師の皆様方はやってくれていると私は信じている。

里村委員 少し誤解をされている可能性があるので申し上げるが、平均的な学力や体力はつけてあげなければいけない。それを否定しているわけではなく、それはそれでしっかりとやりながら、一人一人の強いところを将来にわたって伸ばしてあげようという頭を先生には持ってほしいと思っている。

資料を見ると、小学校と中学校の節目の部分と、中学校2年生、3年生でポジティブなものが少し落ちるといった傾向が見てとれるので、そのころになったら、先生方全員が一人一人の子供の強いところを伸ばしてあげる教育をする。やっぱり教育をする

というのは、弱点を直してあげる教育と長所を伸ばしてあげる教育を相まってやらなければいけないと思った。

教 育 長 それぞれの子供には特徴があつて、良い面もあれば点数でいうと低い面もあつて、良い面を褒めて伸ばす教育と、低い面を手厚く支えてあげる教育。そういった両面のきめ細かな一人一人に合った対応というのが現場では求められていると思う。

5 付 議 事 項

第 14 号議案 小学校および中学校の通学区域に関する規則の一部改正について

(学事課長 説明)

花 輪 委 員 経過措置について質問である。例えば今年小学校1年生の生徒は、希望すれば6年まで袋原小学校にいられるということなのか。

学 事 課 長 おっしゃるとおりである。

花 輪 委 員 これは大変ご努力されて了解をとられたのだと思うのだが、そもそもこの計画は数年前から始まっていたのか。

学 事 課 長 対象地域のどの部分を通学区域変更するか等の検討は、数年前から行っていた。

花 輪 委 員 具体的に保護者や地域の方に数年前から相談し始めて、今回、了承が得られて提案されているということか。

学 事 課 長 実際に地域の皆様や保護者の皆様とお話し合いを始めたのは、昨年6月からである。

原案のとおり決定

第 15 号議案 仙台市学校給食運営審議会委員の委嘱等について

(健康教育課長 説明)

原案のとおり決定

第 16 号議案 仙台市スポーツ推進審議会委員の委嘱に係る市長への意見の申出について

(スポーツ振興課長 説明)

原案のとおり決定

6 閉 会 午後4時45分